

不思議の島ニュージーランド

シャクナゲ・プライベートガーデン・農園視察

山 口 ま り



ブケティガーデンにて Mr. Keith Adamusと一緒に

2003年10月28日～11月4日実施。6～7月に予定されていたドイツのIGAやアイルランドの第13回海外園芸事情調査団が新型コロナウイルスの流行やイラク戦争の影響で中止になり、参加申込者の要望により急遽計画されたニュージーランドの旅であった。

南半球にあるニュージーランドは、日本とは季節が逆になり、日本の4～5月というところ。南島でも春の花がそろそろ終わり、夏の花に植え替えが始まっていた。

10月28日（火）

日本からの参加は27名。土砂降りの中、P.M.6:30の定刻よりだいぶ遅れて一路クライストチャーチへ向け離陸。

ニュージーランドの国土は、日本の70%ほど、人口400万人（羊は4760万頭）、オークランドが日本の東北地方南部、クライストチャーチが北海道中央部の緯度とほぼ同じ位置だが、西岸海洋性気候で夏の平均最高気温が22.8、冬の平均最低気温が7.8という、植物を育てるにはうってつけの気候である。また、東京と同じくらいの雨量があるが、平均して雨が降るようで、木々の幹には小型のサルオガセのようなコケが着生している。

10月29日（水）

クライストチャーチ

機中で一夜を過ごし、ニュージーランド時間（日本との時差は+4時間）A.M.10:30にクライストチャーチに到着。クライストチャーチも小雨が降る肌寒い天候。空港でロサンゼルスから参加される石原ご夫妻と一緒に総勢29名のツアーとなる。

ターミナルビルの駐車場の植え込みには青色の小花をびっしり付けたミヤマホタルカズラの群落やツツジ、なじみのない花木（*Choisya terrata*, *Pittosporum tenuifolium* など）が植え込まれ、あしらいに使われたニューサイランに、さすが原産地と思う。クライストチャーチの市街地へ向けバスを走らすと、銅葉のカレックス（？）が道路沿いに植え込まれて、街路樹や庭木としてニュージーランドの国花のコウハイ（*Sophrha microphylla*）が植栽され、黄色の花を満開に咲かせている。

クライストチャーチは人口35万人の南島最大の都市だが、市の中央部には両岸に広い緑地のスペースのあるエイボン川が流れ、街の半分の面積を占めるハグレ公園（182ha）があり、緑豊かなゆったりとした雰囲気のある都市である。最初の訪問は、クライストチャーチ大聖堂。その後、エイボンモナベール（Mona Vale）ガーデンに寄り、川沿いに作られた庭園を散策。シェードガーデンのコーナーに、定番のヒューケラやギボウシのほか、Chatham Islands forget-me-notといわれる



ニューサイランの植え込み



ディック氏の庭園

クライストチャーチ



Myosotidium hortensia
 がつややかな葉を広げ
 ブルーの花をつけてい
 る姿に出会った。

Chatham Islands forget-me-not

フジ、ツツジ、シャクナゲが満開のなか、2mにも育った *Pionia lutea* の姿にニュージーランドの温暖な気候をうらやましく思う。

昼食は、クライストチャーチ郊外の牧場地帯にある個人宅を訪問し、ニュージーランドの家庭料理をご馳走になる。リビングの前庭には、ワトソニア、パンジー、オダマキ、シスタスなど春の花が爛漫に咲き、淡いピンクの八重桜が印象的であった。

午後、クライストチャーチに戻り、ガーデンコンテストの入賞賞連の個人の庭園（ディック氏とブリックス氏）を2箇所見学。

その後ホテルにチェックインし、夕食までのしばらくの間、ハグレ公園の一角にある植物園の見学。ここでもシャクナゲの大木やウツギ、各種ツツジが満開。足元にはスキラ・カンパニュラタが群生している。公園内の草原にはバビアナが野生化して赤やオレンジ色の花が盛りであった。

夕食は、ホテルのレストランでのエディブルフラワーをあしらったコース料理。

11月30日（木）

ニュープリマスでシャクナゲと

空路、ニュープリマスへ。ここから北島の旅が始まる。雲の中の飛行となり、ニュープリマスも曇りがちの天候。ガイド氏曰く、「ニュージーランドでは夏以外は、一日のうちに四季があるといわれるくらい、天候は不順です」とのこと。

市内の住宅街には、いたるところシャクナゲの花が見事に咲いていた。富士山によく似た山容のタラナキ山周辺68のガーデンが参加し、「タラナキ シャクナゲ祭り」が10月24日～11月2日に開催されているのもうなずける。世界中で1500種ほどあるロードデンドロンのうち、タラナキ周辺では1000種が見られるという。

北島では、ニュージーランドクリスマスツリーといわれる *Metrosideros exclsa* が、パフのような真っ赤な花を咲かせている。

バスの車窓からニュープリマスの市街地を観光し、昼食のため谷筋に作られた庭の美しいB&BのTupare Gardenへ着く頃には、雨は本降り。食事中に雨が上が



プケティガーデン
 シャクナゲの大木と木生シダ



ホラードガーデン
 ツリーデージー（*olearia*）

ることを期待したが、期待はずれ。10m以上はあると思われる大木のダビデアが満開であった。

その後、Pukekura Park & Brooklandsを訪問。ここは、ニュージーランドの原生林が残されていて木生シダ、小型のヤシ、ニューサイラン、アロウカリアなどが茂り、いたるところ苔むしていた。まるで、映画の“ジュラシックパーク”のようで、今にも恐竜が姿を見せそうな雰囲気である。

10月31日（土）

庭園めぐり

相変わらず雨が降ったり止んだり、晴れたりで傘が離せない。

ナショナルトラストに指定されているHolland Gardensは、1927年からBernie Hollandがニュージーランドの自然の植生を生かしながら、世界中から集めた植物を植栽した庭である。園内にはツリーデージー(*olearia*)の1mを越える株が、白やピンクの花を咲かせていたのが印象的であった。日本では育たないということだ。

途中タラナキ山に掛かる鮮やかな虹に歓声をあげながら、山腹の原生林の細い道を走り、中腹にあるシャクナゲとツツジのコレクションで有名なプケティガーデン(Pukeiti)を訪れる。早咲きの種類はすでに花が終わっていたが、多くの種類は開花真っ盛り。80歳を過ぎているというMr. Keith Adamusの案内で公園内を見学。シャクナゲの多種多様な花に驚かされる。

薄日が差し始めた中、訪れたンガマクガーデン(Ngamamaku)は、Mr. Tony Barnes & John Soleが17年ほど前から整備を始めたという現在進行中の個人の庭園である。敷地内には小川が流れ、湿地帯の植物から草花、バラなどの花木まで、原生の植物と小高い丘の起伏をうまく利用した変化に富んだ庭である。



一枚の絵画を見るように



サルビア・レウカンサとオステオスペルマムが同時に開花している
オークランド植物園

11月1日(日)

ロトルアへ

ほとんどバスで移動の一日となる。

途中、トンガリロ国立公園の高原地帯に広がる湿原は、ニュージーランドの原生の姿であろう。葉の長さが3mほどもあるニューサイラン、褐色のスゲの仲間、イグサの仲間などの単子葉植物が茂り、草の間は厚くミズゴケのようなコケ類で覆われていた。ようやく冬が終わったところのようで、まだ、寒々とした景色であった。

ニュージーランド最大の湖、タウポ湖の畔のレークランドで昼食休憩。タウポ湖から流れ出るフカ滝を見学するが、コウハイが黄色の花を咲かせ、一同滝よりも植物に目が行く。

長いバスの旅が終わりようやく着いたロトルアは、温泉の町。先住民の文化を保護しているオヒネムツマオリ工芸村を訪れマオリの歴史と文化に触れた。園内の開けた場所にはギョリュウバイが2～3mにも伸びて、1.5cmほどの白い花を咲かせていた。ギョリュウバイをニュージーランドでは“マヌカ”といって、これから取れる蜂蜜を“マヌカハニー”といい、天然の抗菌物質と言われているということだ。

ロトルアのシンボルのガバメントガーデンを訪れ、チューダー朝様式のシンメトリーの建物、春の花が盛りの庭を見学。夜は、ホテルでマオリのショーとマオリの伝統的なハンギ料理を堪能。

11月2日(月)

オークランドへ

オークランドへ向けて出発。やはり今日も雨模様。少し遠回りをしてワイトモ鍾乳洞と土ポタルを見学。真っ暗な洞穴で淡い光で輝く土ポタルの幻想的な光景に、異空間に迷い込んだようでしばし現実を忘れる。

昼食後は、オークランド郊外の1964年から整備を始めたというエイリーズガーデン (Ayrilis Garden) を訪

れ、Mrs. McComell に庭園の歴史や庭を案内してもらう。入り江に面した小高い丘にあり、海を借景に見事な景色を演出している。ここも起伏を利用した庭で、ロックガーデン、ローズガーデン、シェードガーデンなど各コーナーが工夫されている。背丈50cmほどのシネリリアが野生化して林のあちこちに桃や青紫の花を咲かせている。南アフリカ原産の植物も見事に生育しうらやましい限りである。

ニュージーランド一の都市・オークランド市街に入る。噴火口跡の標高196mあるマウント イーデンの展望台にバスのまま登り、オークランドを一望する。

11月3日(火)

切花農家視察

いよいよ最後の日である。午前中は、日本へ切花を輸出している「インターナショナル&グローバルオークランドコーポレーション」の柳沢氏の案内で、大型シンビジュームの切花農家とカラーの切花農家を訪問。

昼食後、ニュージーランドの原生の植物やオーストラリアの植物が多く植栽されているオークランド植物園 (Auckland Regional Botanic Gardens) の見学。ここでは、秋の花であるダリアやサルビア、春の花のウツギ、ジャーマンアイリス、マーガレットや、オーストラリアのアニゴザントス、グレビリアなど、日本の常識では考えられない組み合わせで花が咲いていて、改めて不思議の国ニュージーランドと思う。

オークランドの中心部に戻り、午後は自由時間。それぞれがショッピングを楽しむ。夕食は、ハーバーサイドビルにてシーフードのフェアウエルディナー。それぞれが楽しかった1週間の話題に花が咲いた。

11月4日(水)

A.M. 9 : 30発のニュージーランド航空で成田へ。予定通り日本時間P.M. 4 : 30成田着。全員元気に旅を終え、多くのお土産を携え、帰路に着いた。